
200文字詩&小説集

藤夜 要

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

200文字詩&小説集

【Nコード】

N1920N

【作者名】

藤夜 要

【あらすじ】

ジャスト200文字の連作。「ジャスト200文字の小説たち」(<http://200moji.seesaa.net/>)を応援しております。

啼き声

黄昏時の声がいつの間にか変わっている
帰路の脇を覗けば蝉の骸が増えている

暑苦しいと嘆いたその声も

気づけば随分、少ない

変わって涼やかに鼓膜を揺するは

ひぐらしの寂しげな声

ほかの子らと同じ時期に啼くはずなのに

この子だけが、寂しげに啼く

憤ましかに寂しげに、黄昏時を選んで啼く

いつもこの時期に気づくのだ

ひぐらしの所為じゃない

「今年も帰り損ねたな」

呟けばまた彼らが啼く

お盆のたびに悔やむ自分が相変わらず今年もいた

とある物書きの眩き

光はモチベーション

酸素は題材

水は身の内に宿る天性の、何か

私という名の花は、そのみつつからなんと
言う種類の花を咲かせるの
だろう

雨の日は光のなさで泣きそうになり 曇る時は「そんな時もあるさ」
と無理して笑う
燦々と降り注ぐ快晴の陽射しは 私に泉の如くそれらを惜しむこと
なく与えてくれる

酸素は常に私に優しく そこに在る

誰か、私に水を下さい
才能という名の水を下さい

願わくば、「作家」という名の花を咲かせたいのです、私は

成り損ないの鬼子母神

逃げ尽くしたその先に待っているものを考えたことがある？

甘えて頼って縋って代わってもらった結果、何が待ち受けているのかを考えると言ったよね？

誰もキミの人生の代わりなんかしてくれない

出来る人なんてこの世にただのひとりもいない

自由と権利を求めるのなら責任と義務も背負うのが世の摂理

ある日突然大人になって背負わされるものじゃない

それをいつか解って欲しいと 今日鬼の形相をしながら吼えつつ
心の中では泣き狂う

日米中

大和は愛や慈しみを信じる
己を貪る漢もいつか、この愛を解ってくれると

大和は義や徳の存在を信じる
搾取する米も、その恩義を大儀の時にこそ返そうとしているのだと

守り受け容れるのが女の性
攻め突き進み往くが男の性

だが時折大和はふと考える

我が吾子達は、どうなるの？

愛するあまり憎らしくなる
憂う源を疎ましく思う
そして、絞める、その首を
悲鳴を上げるはいつも吾子達
無力なる吾子達なのだ

J*BAKU

壊れる前に 壊してしまおう

失う前に 砕いてしまおう

奈落の底へ突かれる前に 自ら無間の奥底へ沈んでゆこう

繋がれた手振り払われるくらいなら いっその手を斬り捨てよう

自爆 呪縛 自縛 オノガコトバニ オノレガトラワレ シバラレル

地を這い 血を吐き そして責を委ねる誰かを探す

オマエガ コワソウトスルカラ

オマエガ ケソウトスルカラ

オマエガ キエヨウトスルカラ

ダカラ カワリニシタノニ

ダカラ ソノ手を離さないで

今更人の振りなんか——シナイデ

XXXがママにキスをした

「サンタがママにキスをしたって歌の歌詞、ロマンティックで好きだったわ」

そんな話を夫にしたら鼻で笑われた。

「あれは留守がちな夫の目を盗んで愛人と会ってる妻の話さ。子供にサンタだとかまかせるようにね」

私の顔が「夢のない人」とごちながら歪んだ。

今年も出張で夫不在のクリスマス。夜にサンタはやって来た。

「ばれたのかしら」

甘いキスの後にそう話したらサンタが口髭を取ってにたりとした。

「やっぱり」

正体は夫だった。

夜の帳にほふられ、骸とさせられたあなたに追悼を

いつも温かく私を包んでくれるのが当たり前だと思っていた。

「ごめんなさい」

冷たくなつた骸を、私は渾身の力で抱き上げる時にそう囁いた。

「だからお願い。もう少しだけ」

はたりと落ちた私の涙が、あなたをより一層湿らせた。

もうあなたに包んではもらえない。こんなに薄く冷たくやつれたあなたじゃあ。

「……もうダメね」

夜の帳が降りた空を睨んで私は呟いた。

「日没が早過ぎるのよ」

冷え切った布団はもう使い物にならなかった。

言葉

世知辛い世の中。すさんだ言葉の飛び交う毎日。今日もワイドショーを見れば、人のことなどどうでもいいのに、やっかんでいるのをご尤もな言葉でごまかしながら語るコメンテーターが、私に溜息をつかせてくれる。

「まー、まっ」

抱いていた柔らかな温もりが、くいと私の視線を自分の方へ向けさせる。

「しゅーきっ」

そして優しく甘いくちづけが。

「もう、はぁちゃん、大好きっ」

好き、そのひと言だけで、こんなにも世界は素敵なのに。

二十年越しのクリスマスプレゼント

二十年前、小学校卒業記念にみんなで未来の自分に宛てた手紙を書いた。それを書いたのが二十四日だったから、私は勘違いしてサントへ手紙を書いてしまった。

『ステキなお母さんになれるアイテムをください』

今日、二十年の時を経てプレゼントが届いた。この手紙と、もうひとつ。

「友達が届けてくれたのか」

「うん」

私は今日、同窓会を欠席した。夫に大切な話があったから。

「願いが叶ったの」

「え」

私は母子手帳を手に、微笑んだ。

初夢

今年の初夢は最悪だ。夫が死ぬ夢、だなんて。実家で過ごそうと段取りをしてくれた。

おめでとうも言い交わした。ちよつと変な汗が出る、具合が悪いと布団に入ったけれど、その寝顔はいつもと同じ。

みんな、やめて。

「何か出来ることがあれば」

なんて。これは私の悪い夢なんだから。

「早く目が覚めないかな、って思っちゃうんです」

そう言った途端、弔問に訪れた方が涙をはたりと零した。早く夢から覚めたい。私は本気でそう思った。

私の為に、ココアを淹れる

ミルクパンでゆっくりとミルクを温める。膜が張らないように気をつけて。

ほどよく温まったら、ヴァン・ホーテンを三匙。

ほんの少し砂糖を入れて、そして生クリームを可愛らしく絞り入れる。

「たっだいまーっ、さっぶー、あっ、ココアの匂いっ」

その声で咄嗟に玄関へ向かい掛けた足を踏みとどまらせ、急いでガスコンロをオフにする。

「お帰りなさい。おあがり」

「えへえ、ありがとう」

その笑顔見たさに、今日も私はココアを淹れる。

強欲 Greed

何ひとつ捨てられない癖に
何ひとつ諦められない癖に

そう言っ
てせせら笑うあいつの名前は、
“強欲”という名の、悪魔。

手に入れなよ、すべての欲を満たしなよ
それを願っていたんだろ？
だから導かれて俺は来た

振るう刃は私を解き放ち、しがらみという足枷が私からころりと
転がり落ちた。

家族、友、夢、希望。失ったもの。

後悔、孤独、罰、絶望。身の内に宿ったもの。

強欲の末にすべてを失い、そしてグリードによって魂まで失った。

転んでも、ただでは起きない

姑が高い位置にあるエアコンのプラグを抜こうと奮闘していた。

「言ってくれば私がやるのに」

そう言ったら姑が済まなそうに言った。

「あんたはいつもこんな大変なことを日頃からしとったんやね」

こんな時ばかり偽善をしている自分が情けなくて言えなかった、と。

「若い私にこの程度がしんどい訳ないでしょ」

わざと笑い飛ばして言うとか姑もつられて笑ってくれた。

私達は転んでもただでは起きない強い心を持っている。そう信じたい。

妥協

昨夜、彼と喧嘩した。仏頂面なんて珍しいから「どうしたの？」と聞いただけなのに。

「うるさい」

負けず嫌いな私と彼。当然の修羅場を繰り広げ、別々のベッドとソファに横たわる。

そして今朝。

「ごめん。話せば余計に腹が立つと思ったから、訊いて欲しくなかったんだ」

キッチンに置かれたそれを見て、そしてソファでまだ寝ている彼を見る。

「……ま、いつか」

結局口の端を上げてしまう私は、今日も彼のための朝ごはんを作り始めた。

マトリョーシ、か？

開ける 開く マトリョーシカ
巡る 巡る 溢れ 溢れる
懺悔 後悔 憤怒 悲哀 悦楽 至福 溢れ出る

マトリョーシカと思ったそれ
本当はパンドラの箱？

見ようにも 視界がたゆたい 空っぽなその中が見えない

たまねぎのように 剥いたそれを
泣きじゃくりながら ふたをする

最後の 最期の さいごの ひとつ
私は 開けてしまったのだろうか

ごめんね 間違ってた バカじゃないの？ フザけんな よかつ
た ありがとう 溢れ出る

怖くて二度と覗けない
マトリョーシカなそれを封印した

時を待つ

早朝、ふと庭木の枝に目を遣ると、蝉が羽化する処だった。
白く柔らかな身は、穢れを知らぬ幼子の様に輝いている。

「あ」

私は思わず縁側から飛び出し、それを狙う椋鳥を追い払った。

蝉の羽が次第に乾き、無垢な身に彩りが添えられる。蝉は微動だもせず、ひたすらにその瞬間を待っていた。

やがて大きく羽を広げ、ジジと啼いて飛び立った。

私は飛び立つ勇氣に心からのエールを送りながら、神々しい物を見る思いでその雄姿を仰ぎ見た。

泣きながら剣を振るう者たち

素直に違いを認めることが、いつから、そしていつの間に

「負」

「弱」

だなんて概念になってしまったのだろう。

他者のささやかな間違いに対し、存在そのものにまで糾弾の嵐が舞い乱れる。

批難という言葉の刃が切り刻む。

まるで自分が批難されることから身を守るためとばかりの必死さで。

泣きながら剣を振るう、傷だらけの少年兵のように。

本当は素直な気持ちを言の葉にのせたいほど認め合いたいのに。

それが今、という、哀しい世界。

天才論

「大成しないのは努力が足りないからだ」

大成したあいつはそう言っ て僕を嗤った。

それは天才が絶対に言うお決まりの台詞。

努力すれば必ず実る、それこそが天才と凡才を分けるモノだろう？

そんな正論を某巨大掲示板に書き連ねた。するとある名無しがレスして来た。

「努力が必ず成功に結びつくという天才論には賛成だけどね」

——ここに書きこみをして努力を怠っている君に、それを言う資格はない。

それはあいつの口癖と同じだった。

勤労感謝

勤労感謝の日なのに、と愚痴零して働く職場の人達。

その愚痴話に愛想笑いを返しながら、私は心の中でだけ異議を唱える。

働いている人に感謝するだけでなく、働ける環境にある現状に改めて感謝する日であってもいいのではないかと。

きつとでも、一度失ったことのある人でないと、そして再び得ることに苦心した人でなければ解らないだろうから。

だから私は、ただにこりと笑う。

こっそりと、雇用主に感謝の言葉を思い浮かべながら。

喪失

多くを語っても言い訳と自己弁護にしか聞こえないだろうから何も言わないまま消えるけれど。

だけど僕は、キミが大好きだった。

現実には、ときに残酷で「所詮こんなモノ」と冷笑さえ浮かばせる冷たいものだけれど。

キミに僕が必要ないというなら、それでも構わないかなと今は思う。

ひとつづきに繋がっているこの空の下、キミが笑って過ごせているのなら、僕はそれでいい。

そう思うことにしようと思う。

さようなら。

そして

ありがとう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1920n/>

200文字詩&小説集

2011年11月26日18時52分発行